

第17回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

風間 完

～名作を彩る叙情画家～



展示期間：令和2年11月28日(土)～令和3年1月28日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに	1
風間完	2
○家族 ○戦時中 ○日々の生活 ○パリ時代	
風間完を取り巻く人々（相関図）	5
共に仕事をした作家たち	6
○池波正太郎 ○五木寛之 ○遠藤周作 ○司馬遼太郎	
○瀬戸内寂聴 ○松本清張 ○向田邦子 ○山本周五郎 ○吉行淳之介	
親交のあった芸術家たち	12
○野見山暁治 ○瀧口修造 ○脇田和	
風間完が親しんだ街、中野	14
「父の教え」～風間正氏インタビューより～	18
風間完の風貌	19
年表	20
雑誌・新聞連載作品 挿絵年表	23
展示風景	27
展示物	28
ブックリスト	35
原画を収蔵している資料館	40



はじめに

中央図書館では、毎年、中野区ゆかりの人物を特集する展示を行っています。
今年度の特集は画家・風間完です。

風間完（1919-2003）は、挿絵画家の第一人者とも呼ばれ、松本清張、司馬遼太郎、五木寛之、池波正太郎など、人気作家の話題作を数多く手がけました。

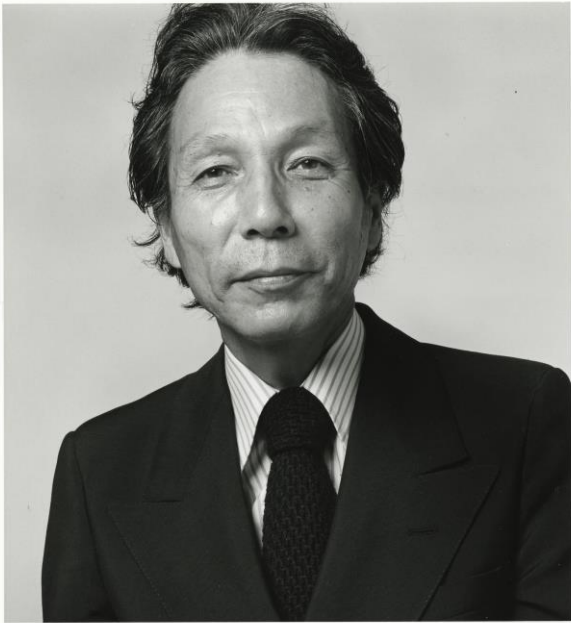
中野には50年近く暮らし、完のユーモアある洒落た筆致で綴られたエッセイには、中野駅周辺の行きつけの店や人々と交流する様子が描かれています。一時は近所の子どもたちを集めて絵画教室を開いていたこともあり、地域でも愛される画家でした。

本展では、中野での暮らしにも触れながら、情感あふれる美人画、風景画で人々を魅了し続けた風間完の世界を紹介します。

かざまかん
風間完

大正 8(1919)年 1 月 19 日～平成 15(2003)年 12 月 27 日

画家。大正 8 年 1 月 19 日、東京八丁堀で十人兄弟の八男として誕生。関東大震災で八丁



堀にあった実家が焼け、住まいを移す。東京高等工芸学校木材工芸科(現・千葉大学)卒業後、東北で図画の教師になるが、兵役のため満州に出征。帰国後、様々な職業を転々としながら絵画を制作し、新制作展に出展。また、海外同胞援護会が出していた月刊誌に挿絵を描き始めた。昭和 20 年、疎開先の栃木で宇都宮工業高等学校(現・宇都宮工業高等学校)の美術教師となるが、辞職し、幼い頃から好きだった絵の仕事を本格的に志すようになる。終戦を迎えると、

▲ 風間完 写真提供：風間正

栃木から東京へ戻り、博友社(前身は博文館)で

『講談雑誌』の編集をしていた長兄の家に身を寄せ、彼の紹介で山本周五郎の挿絵を手がける。個展も開催し、24 年には新制作派協会展新作家賞を受賞。この頃、中野に移り住む。

昭和 28 年 6 月 21 日から朝日新聞に連載された邦枝完二の新聞連載小説「恋あやめ」の挿絵を手がけると、それまでの挿絵界になかった洋画風の描写で注目を集めた。挿絵画家として忙しくなるなか、32 年、憧れであったフランスのパリへ 2 年間留学し、モンパルナスの美術研究所グランド・ショーミエールで学んだ。

その後も多くの著名作家の作品に挿絵で参加し、平成 14 年に「情感あふれる美人画、風景画などの画業」を理由に菊池寛賞を受賞。挿絵以外に本の装丁も手がけ、絵画制作、エッセイの執筆など、多くの仕事をこなした。画集の他に『エンピツ画のすすめ』『さし絵の余白に』など著書も多数ある。15 年死去。享年 84。病床でも筆を握り、死に際しては「みなさん仕事や何かで忙しいのだから」と、訃報、葬儀などの一切を固く禁じたという。作家の高橋治は、「風間さんの絵の女は、いつも迷っている作家に行くべき道筋を示してくれていた」と完の死を悼んだ。

家族

地方から上京した両親の元、10人兄弟の8番目に生まれた完。八丁堀の生家が関東大震災で焼けたのは4つのときだったが、この土地の記憶は心象風景としてはっきりあったという。父は海運業で成功したハイカラな趣味人で、完が成人する頃亡くなった。母は90歳を越えるまで長生きしている。兄弟には文化・芸術方面に携わった者が多く、長兄は編集者・風間真一(筆名：三木菟一)、すぐ下の妹はエッセイスト・十返千鶴子(夫は完も装幀を手がけた評論家の十返肇)。兄泰男は日本史教育研究会会長として活躍し、兄益三はユーモア作家として、末弟は風間十郎名義でゴルフ評論の分野で活動した。千鶴子によれば、男兄弟は皆酒呑みだったらしい。完自身は、妻と息子3人をもうけた。

戦時中

昭和14年に東京高等工芸学校卒業後、1年の教師生活を経て徴兵された完は、生涯兵隊時代のことを語りたがらなかった。復員後、終戦頃までは再び栃木県の宇都宮工業高等学校の美術教師をした。当時学徒動員先の工場で学校事務をしていた女生徒が記した完のエピソードが『真岡市史』第8巻に引用されている。

完は同部屋の教師と生徒数名とで油絵2号(長辺24cm)程の大きさの本を一部発行した。この生徒は詩を書き、完も『レ・ミゼラブル』を下敷きにした詩を記した。“ああ、^{みぞれ}雲が降る、雲が降る／僕には、今、さす傘がない／これが、本当の『レ・ミゼラブル』である。”というような詩だったという。「ミゾレブル」と「レ・ミゼラブル」の語韻の類似とともに、B29機による爆撃を雲に置き換え、その冷酷悲惨を受け止めるものがない哀れさを『あゝ無情』に託したもの、と生徒は読み解いている。

本の名前は『職場の^{そよかぜ}微風』。発行者の所に押した捺印がどうにも読めず首を傾げる生徒に、「印とはしるしだろう。しるしとは己の証だろう。したがって『これが僕のしるし』と認めれば良いわけで、二つ同じ物がなければ即ち僕固有のものさ」と説いたそうだ。

戦後東京へ戻った完は、絵一筋の道へと進む。

日々の生活

挿絵の仕事は時間に縛られる。毎日の新聞連載ともなれば当然、完成品を週7日分仕上げなければならない。完は挿絵の仕事以外にも、書籍の装幀や、書籍以外のイラストの依頼を引き受け、所属した新制作協会の展覧会やチャリティー美術展にも出展していた。さらに、数々の雑誌にエッセイを残し、絵本も出版している。

そんな中でも、完は朝9時から夜18時まで仕事をする規則正しい生活を送っていたという。野球やゴルフ、水泳、実益を兼ねて散歩を好み、自宅では指物作りに精を出し、パイプや蕎麦猪口の収集もしていた。特にゴルフはシングルプレイヤーの腕前で、文壇コンペでもよく優勝している。

忙しさの中でも、楽しみを忘れない仕事人であった。

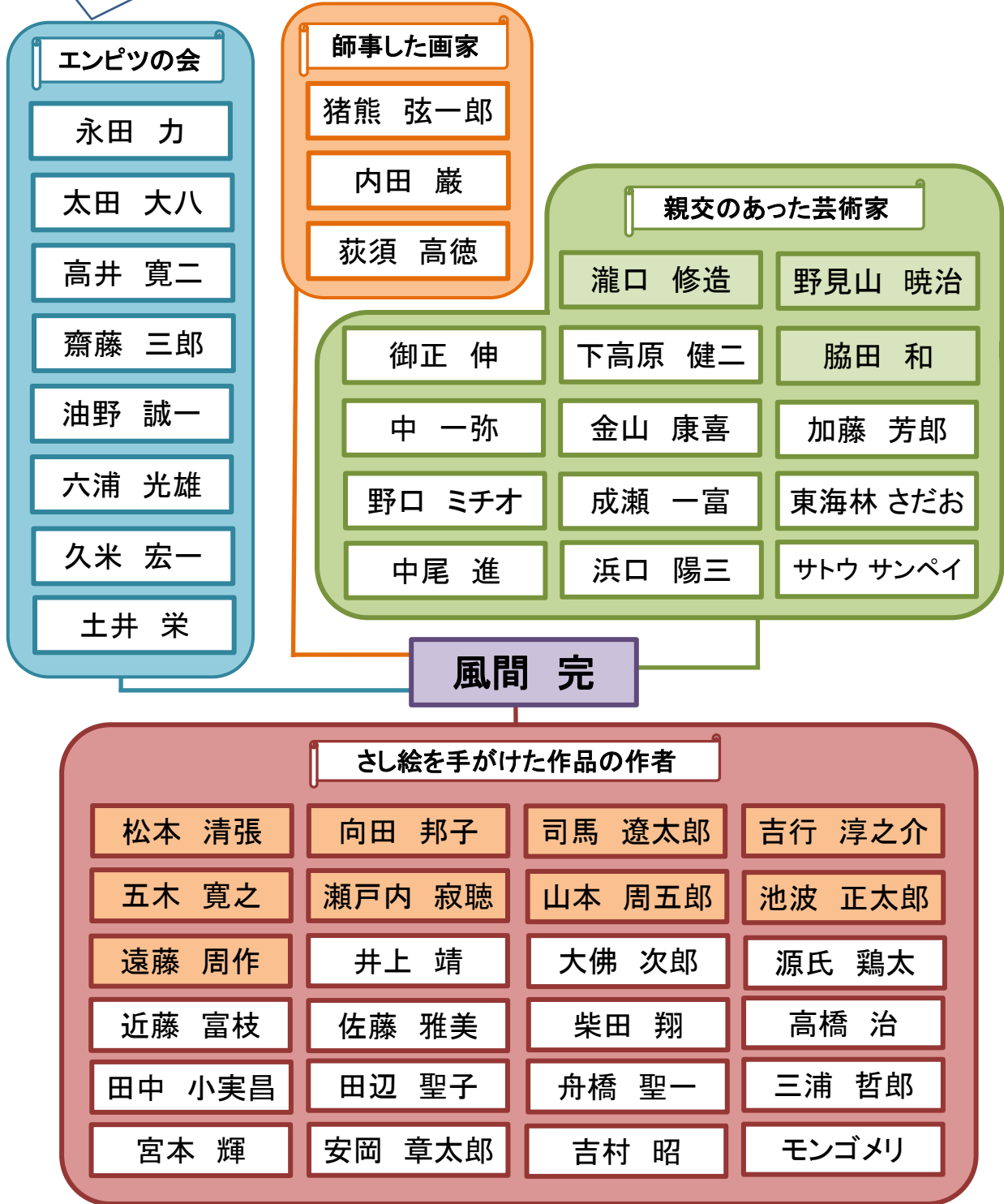
パリ時代

邦枝完二の「恋あやめ」の挿絵で一躍知名度を上げた完。三十代半ばの昭和32年、「見るものすべてが勉強だからと、帰るまでにパリから文明開化をむしりとる意気込み」をもってパリに2年間留学し、銅版画を学んだ。この時期の留学は、前年の雑誌『さしゑ』3月号の挿絵画家5人の座談会で、「われわれは製版をもつともつとよく知らねばだめだ」と発言していることと関係がありそうだ。滞仏中は絵の勉強をする傍ら、料理を器用にこなし、蚤の市にも顔を出し、瀧口修造や浜口陽三、金山康喜、野見山暁治らと親交を持った。昭和42年にも、複数の連載を抱えつつ1カ月半再渡仏、フリードリッヒ工房に学んでいる。昭和53年から54年にかけて、滞仏中の作品と新作を加えた銅版画集『パリ時代』全3巻を発刊。その後も完は仕事で多忙な中、版画制作に時間を割いている。

完にとってのフランスは、「絵描きの心をとらえてしまうデモーニッシュなものがあって、行きたいとなると矢も楯もたまらなくなる」場所であった。後にヨーロッパ旅行で再びパリを訪れると、慣れ親しんだ建物は跡形もなく壊され、近代的な団地に変わっていたというが、完にとってパリが特別な場所であることに変わりはない。「どこへ行っても、初めてパリに行って暮らした頃に得た思いが私の基礎になっているのではないかと思えるのです。今でもあの時代を時々思い出しています」と、晩年に語っている。

風間完を取り巻く人々

昭和28(1953)年に結成。東京の美松画廊で展覧会を開催。



※色付きの人物は次ページ以降に解説あり



共に仕事をした作家たち

完は34歳で「恋あやめ」の挿絵を描いてから、以後ほぼ途切れなく挿絵の仕事が入っている。挿絵の仕事との向き合い方は、まず「小説をよく読んでイメージを作り出す、そして作家を理解する、そこで自分なりの解釈をする」ことから始まる。時には作家と取材旅行を共にし、そこで取ったメモやスケッチが挿絵に深みを持たせていった。

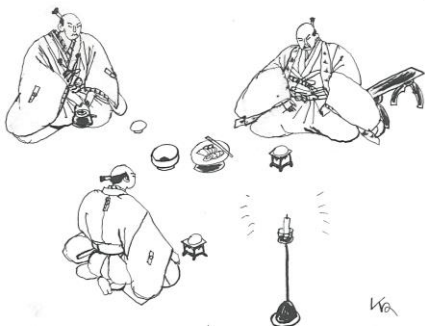
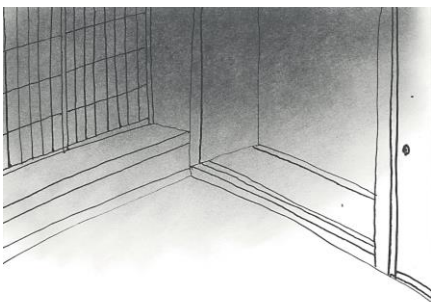
完の挿絵は作家にも多くの影響を与えた。完と作家の共同作業により生まれた名作は数多くある。

いけなみ しょうたろう
池波 正太郎

大正12(1923)年1月25日～平成2(1990)年5月3日

小説家。東京市浅草聖天町(現・東京都台東区)生まれ。小学校卒業後に職につき、戦時中は海軍に入隊。昭和24年より長谷川伸に師事し、戯曲の執筆に励む。35年『錯乱』で第43回直木賞受賞。江戸時代の庶民をいきいきと描く。代表作は『鬼平犯科帳』『剣客商売』シリーズなど。享年67。

池波は幼少の頃から絵を描くことが大好きで、完に頼み、『真田太平記』の挿絵を一度だけ描かせてもらったことがある。これをきっかけに自身の本の装幀や、他の作家の挿絵も手がけるようになった。池波と完の両方をよく知る文芸ジャーナリストの重金敦之は、池波が幼少期の夢だった挿絵画家になれたのは、「ささやかかもしれないが風間完との出会いが、その一助になっているのは間違いの無いところだと思っている」と語る。



◀ 真田父子三人の会談 (『真田太平記』より)

池波正太郎真田太平記館：蔵

いつき ひろゆき
五木 寛之

昭和7(1932)年9月30日～

小説家。福岡県八女郡生まれ。教職にあった両親と朝鮮各地に住み、昭和20年、中学1年の時に敗戦を迎え福岡に引き揚げる。27年早稲田大学露文科に入学したが、5年後に退学。以後、業界誌編集長、ラジオ番組制作、CMソングの作詞や放送台本の執筆などで活躍。

『さらばモスクワ愚連隊』が小説現代新人賞を受けたのをきっかけに作家活動に入る。代表作に『蒼ざめた馬を見よ』『大河の一滴』、訳書に『かもめのジョナサン』など。

五木と完は、『青春の門』執筆の際、共に筑豊へ取材の旅に出て作品の構想を膨らませた。この二人は、作家と挿絵家として互いに触発されるような関係であったという。五木は後に「風間さんの絵を見るたびに、よし、負けてなるものか、と心の中に燃え上がるものを感じる」と記している。また、「風間完さんは、ふともらす片言隻句に人生の機微をうがつものがあって、いつもお会いするたびに何かほっとする」とも語っている。

えんどう しゅうさく
遠藤 周作

大正12(1923)年3月27日～平成8(1996)年9月29日

小説家。東京府北豊島郡巢鴨町生まれ。昭和18年慶応大学文学部予科に入学、20年仏文科に進学。25年から3年間フランスへ留学。帰国して伊達龍一郎名義で『オール読物』に小説を発表。30年『白い人』で芥川賞受賞。歴史小説、エッセイ、ユーモア小説まで幅広く手がけた。平成7年文化勲章受章。代表作は『沈黙』『深い河』など。享年73。

完と遠藤が最初にコンビを組んだのは、昭和63年読売新聞連載の「反逆」だった。その後平成5年、朝日新聞で「女」の連載が決定すると、記事に遠藤の時代小説には完の挿絵が欠かせないと紹介される。遠藤も、「挿絵を風間氏がお引き受け下さったのは何より有り難い」とコメントを寄せた。

し ば りょうたろう
司馬 遼太郎

大正 12(1923)年 8 月 7 日～平成 8(1996)年 2 月 12 日

小説家。大阪市南区西神田町(現・大阪市浪速区塩草)生まれ。昭和 31 年、初めて書いた小説である『ペルシャの幻術師』で第 8 回講談倶楽部賞を受賞。歴史小説や紀行文などを中心に幅広く活動し、「司馬史観」と呼ばれる独自の歴史観で人気を博した。平成 5 年に文化勲章を受章。代表作は『竜馬がゆく』『坂の上の雲』『この国のかたち』など。享年 72。

司馬が大阪新聞文化部の記者であった時代から完とは知り合いで、司馬が小説家に転向すると、朝日新聞で昭和 44 年に連載していた「花神」をはじめ、様々な小説でコンビを組んだ。完は、司馬との仕事について「いつも爽やかな気持ちでしかも充実感を持って」仕事をしたと語っており、長い付き合いの中で生まれた親密な間柄であった。

せとうち じゃくちょう
瀬戸内 寂聴

大正 11(1922)年 5 月 15 日～

小説家・尼僧。徳島県徳島市生まれ。昭和 18 年東京女子大学国語専攻部卒業。強烈な女性たちの伝記的小説を多数執筆。48 年中尊寺で得度受戒し、54 年京都府に寂庵を建てる。その後も徳島県で文化講座「寂聴塾」を開くなど多彩に活躍。代表作に仏教三部作『白道』『花に問え』『手毬』ほか、『美は乱調にあり』『現代語訳源氏物語』など。

完と瀬戸内は、紀行『古都旅情』をはじめ、新聞雑誌連載の仕事で長くコンビを組んだ。完は瀬戸内の描く仏に惚れ込むあまり、般若心経も覚えてしまったという。完は瀬戸内について、“色っぽい”小説を書いていた時も出家後も、変わらず「修験者の眼だった」と語る。

瀬戸内は「京まんだら」を新聞掲載していた頃、完の絵について「自分の小説はさておき、風間さんのさし絵を愉しみに目を覚ましていた」と振り返っている。また、完の描く女性について、「つやがあり、女性の柔らかさや色っぽさをうまく出していた。やさしく穏やかな性格が絵に表れていた」と語っている。

まつもと せいちょう
松本 清張

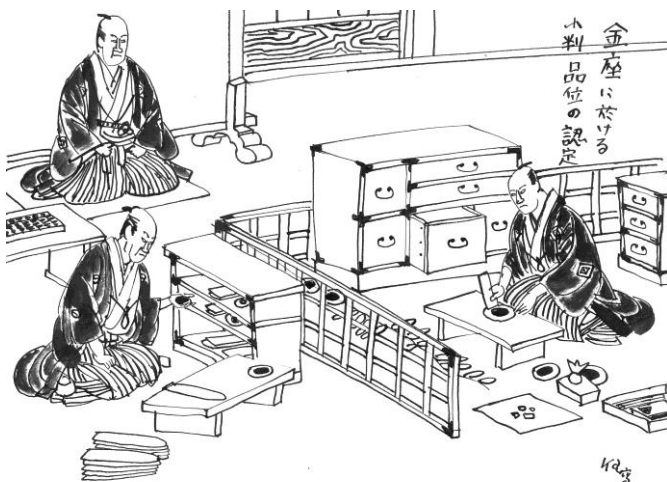
明治 42(1909)年 12 月 21 日～平成 4(1992)年 8 月 4 日

小説家。広島県生まれ。昭和 14 年に朝日新聞西部本社の広告部雇員となり、16 年に正社員。その後兵役につき、終戦後朝日新聞社に復職。28 年『或る「小倉日記」伝』で第 28 回芥川賞を受賞。31 年退社し、作家活動に専念。38 年日本推理作家協会理事長となった。「社会派推理小説」と呼ばれた作品の多くが映像化され、数々の賞を受賞した。享年 82。

二人が初めて顔を合わせたのは『天保図録』の取材で印旛沼に行った時である。松本は完を見た時に「枯れた筆致に似ず長身の若々しい風貌に私のイメージは乱された」という。完が挿絵を手がけた『昭和史発掘』は、連載中にフランスに行った完に代わって、松本が 2 度ほど挿絵を描いたことがある。完は連載でコンビを組んでいた時のことを「松本さんという人は優しい人で、どんな時も私に協力してくれ、私を庇って仕事を進めてくれ、ずいぶん可愛がってもらった」と振り返る。



取材中の清張 ▶



◀ 天保改革 金座に於ける小判品位の認定
(『天保図録』より)

画像提供：北九州市立 松本清張記念館

むこうだ くにこ
向田 邦子

昭和 4(1929)年 11 月 28 日～昭和 56(1981)年 8 月 22 日

脚本家・小説家。東京府荏原郡世田谷町（現・東京都世田谷区）生まれ。昭和 25 年実践女子専門学校（現・実践女子大学）国語科卒業。映画雑誌編集記者を経て、『寺内貫太郎一家』『阿修羅のごとく』など数多くのラジオ・テレビドラマの脚本を執筆。やがて小説も書き始め、55 年連作短篇『花の名前』『かわうそ』『犬小屋』により直木賞を受賞。他の著作に『父の詫び状』『あ・うん』など。56 年台湾旅行の途中、航空機事故で急逝。享年 51。

短編小説「男どき女どき」連載中に航空機事故が起き、向田と完のコンビ最後の仕事となった。完はこの挿絵を描く際、何枚描き直しても不安な構図になったという。「向田さんと私とに似たような心の屈折があるのでしぜん彼女の不安感が私に伝わったのではないかと振り返る。

やまもと しゅうごろう
山本 周五郎

明治 36(1903)年 6 月 22 日～昭和 42(1967)年 2 月 14 日

小説家。本名清水^{さとむ}三十六。山梨県北都留郡初狩村（現・大月市）で生まれた後まもなく横浜に移るが、小学校卒業直後に上京。東京木挽町（現・中央区銀座）の山本周五郎質店で徒弟奉公をする傍ら、正則英語学校、大原簿記学校に通う。昭和元年「須磨寺附近」が『文藝春秋』に掲載され、文壇出世作となった。主な代表作に『樅ノ木は残った』『赤ひげ診療譚』『さぶ』『ながい坂』など。享年 63。

戦争が終わり挿絵の仕事をはじめた完は、雑誌の編集をしていた兄のついでで山本の挿絵を手がけ、その後も時々コンビを組んだ。完は山本の仕事場のある間門町（現・横浜市中区本牧間門）に行った際、帰りに横浜の街へ一緒に出て食事など奢ってもらったという。山本の昭和 25 年 2 月の書簡には「横チン（横溝武夫。雑誌「新青年」の編集長）が風間画伯を伴れて現はれ、約四時間ノンだ」と記されている。完は、「怖い先生と聞いていたが、仕事の合間に雑談などをして下さった」と言い、「古武士の様な反骨の気があり、生涯その姿勢を崩さず見事だった」と山本のダンディで洒落た振舞いに密かに憧れていたと語る。

よしゆき じゅんのすけ
吉行 淳之介

大正 13(1924)年 4 月 13 日～平成 6(1994)年 7 月 26 日

小説家。岡山県岡山市桶屋町生まれ。昭和 20 年旧制静岡高等学校を卒業、東京帝国大学に入学。中退後、22 年新太陽社へ入社。29 年『驟雨』で芥川賞を受賞。小説の他に、多くのエッセイも手がけた。代表作に『すれすれ』『暗室』など。享年 70。

二人が出会ったのは、吉行が雑誌『モダン日本』の編集者だった頃である。ある作家の元に完の挿絵入りの原稿を届けると、こんな挿絵では文章が書けないと言われ、吉行は玄関先で粘ったが結局断られてしまった。完と吉行は酒を飲むと、よくこの思い出話をして、互いに親近感を持ち続けた。

吉行にとって初めての挿絵付き小説『原色の街』をはじめ、完は様々な挿絵を描いているが、その中でも吉行は『すれすれ』と『鼠小僧次郎吉』の挿絵が名作だと記している。



▲ 屋台のどどん焼き（『食卓の情景』より）
池波正太郎真田太平記館：蔵



親交のあった芸術家たち

完は、作家、画家、編集者だけでなく、写真家や漫画家など幅広い親交を持っていた。昭和 52 年に開催された著書『画家の引出し』出版記念会の参加者には、前述の作家たちをはじめ、秋山庄太郎、岡本太郎、加藤芳郎らの名前が並ぶ。芸術という“まぎれの多い言葉”よりも「良い仕事」というシンプルな言葉を好んだ完。親交のある芸術家達からも多くの影響を受けていたようだ。

のみやま ぎょうじ 野見山 暁治

1920(大正 9)年～

画家。福岡県穂波村（現・飯塚市）生まれ。東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科卒業。徴兵された後に病を患い、福岡の療養所で終戦を迎える。昭和 27 年に渡仏、サロン・ドートンヌ会員となる。39 年帰国後、母校東京藝術大学で教え、同大名誉教授となる。文筆でも活躍し 53 年『四百字のデッサン』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。戦没画学生の遺作を収集・保存する「無言館」設立にも尽力した。

完がパリに留学した 2 年間、よく一緒に蚤の市や展覧会に出かけた。野見山がパリの古本屋や絵草子屋に精通していて、完は古い版画の残欠や出版物のイラストなどを丹念に見て歩くことができたという。野見山は完について、「色恋から任侠もの、今の世の中から江戸の風俗、果し合いから戦争まで、醒めた顔をしてのめりこむ、天性の挿絵師」と語る。

たきぐち しゅうぞう 瀧口 修造

明治 36(1903)年 12 月 7 日～昭和 54(1979)年 7 月 1 日

美術評論家、詩人、画家。富山県婦負郡寒河江村（現・富山市）生まれ。幼少より絵画を愛好。昭和 6 年、慶應義塾大学英文科卒業。慶應義塾大学在学中から西脇順三郎やランボー、ブルトンの影響を受けて詩作を始める。同 7 年、PCL 映画（現・東宝）に入社。14 年からは 2 年間にわたって日本大学講師を務めた。この間さかんにダダイズムやシュルレアリスムの

紹介と評論を行い、日本における前衛芸術運動の高揚に貢献。著書に『近代芸術』『幻想画家論』、訳書にブルトン『超現実主義と絵画』など。享年 75。

瀧口は美術雑誌『アトリエ』1952年5月号に風景評「ある風景の場合―風間完の絵について」を寄稿。完の知名度がまだそれほど高くない時代に、完が風景を描くその心象を洞察した文章を綴っている。その後完のパリ留学中には、共に蚤の市や展覧会に行くなど親交を持った。

わきた かず
脇田 和

明治 41(1908)年 6 月 7 日～平成 17(2005)年 11 月 27 日

洋画家。東京都港区青山生まれ。大正 12 年、15 歳でドイツへ渡り、ベルリン国立美術学校に 7 年間学ぶ。昭和 11 年、小磯良平、猪熊弦一郎らと新制作派協会(現・新制作協会)を結成し、以後同展を中心に作品を発表。戦災でアトリエや作品が焼失するも、30 年「あらし」が第 3 回日本国際美術展で最優秀賞、翌 31 年には同作で毎日美術賞を受賞。平成 3 年長野県軽井沢町に脇田美術館を開設した。享年 97。

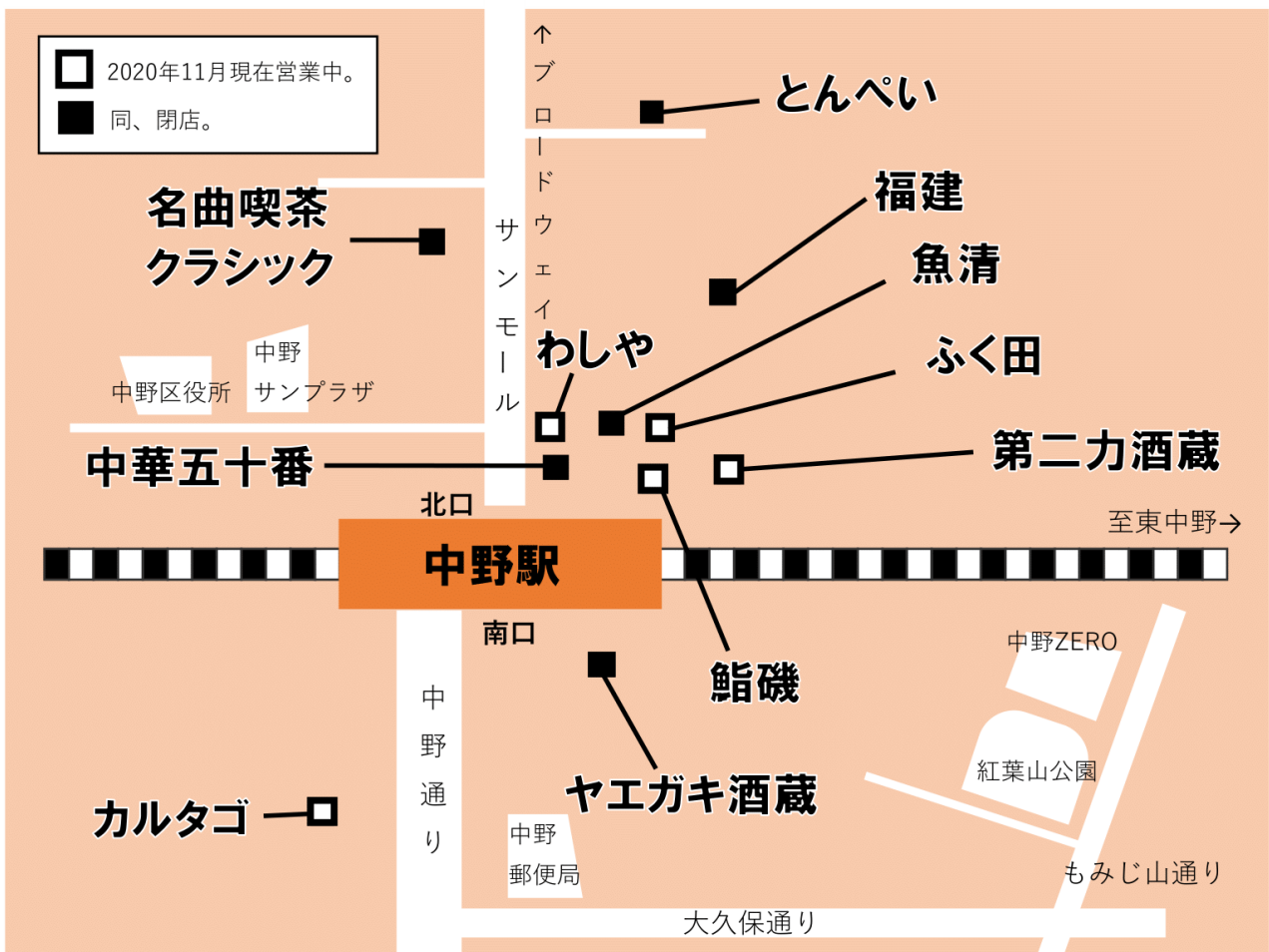
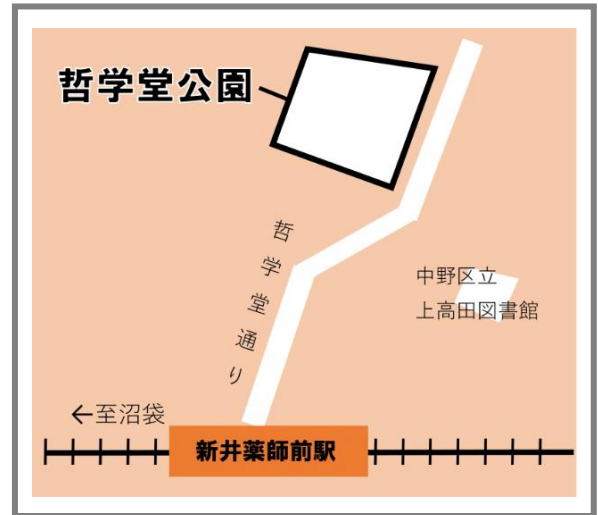
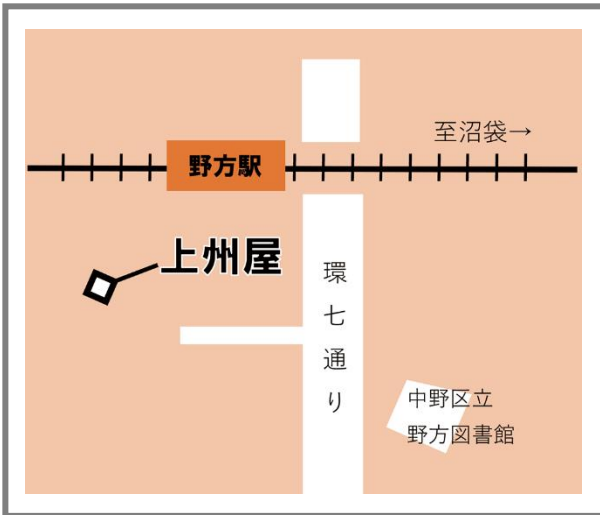
叙情的でぬくもりを感じさせる画風で、『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎/著)の挿絵や、ロシア民話『おだんごぱん』(瀬田貞二/訳)、『迷子の天使』(石井桃子/作)などの絵本作品も多く手がける。

完が二十歳前後の頃から長く交友があった。完は著書の中で、「人となりというよりこの画家の作風を、長い年月の間、私は影響をうけながら一緒に歩いてきているような気がする」と語る。画家同士、会った時に月並みな会話をしなくても、世に出る作品を通して元気で仕事をしているか深く理解し合うのだという。

風間完が親しんだ街、中野

中野、半径5キロ圏内の世界

完が約50年間暮らしていた中野の街。昼間はアトリエにこもり、夕方から住まいの半径5キロくらいを散策し、適当な店で夕食をとる。これが完のルーティンになっていたようで、中野駅界限には行きつけの店が数多くあった。



第二力酒蔵^{ちから}

魚料理を中心とした大衆酒場。

完と親交のあった福田義明氏が経営。店の看板に描かれた、賑わう店内のイラストは完の手によるもの。また、現在の店主によると、店舗の入り口の磨りガラスは「外からはあまり店内が見えすぎない方がよい」という完のアイデアがもとになっているという。

この店では酒を飲みながら編集者との打ち合わせを済ますことも多く、昭和 52 年には完の著書『画家の引出し』出版記念会が行われ、会には作家・画家・編集者・写真家・漫画家といった参加者が 200 名以上集まった。54 年には編集者数名が集まり還暦のお祝いが行われ、完は赤いカシミヤのチョコッキを贈られている。

「魚のだしで煮込んだ豆腐が逸品」(『東京人』 都市出版 1995 年 8 月号)

「客を飽きさせないように、季節のものに店主は絶えず気を配っていて、きめが細かい」

(『小説宝石』 光文社 1981 年 9 月号)



ふく田

第二力酒蔵同様、福田義明氏が経営する魚料理を中心とした割烹料理店。

「あらばしりの会」と呼ばれる忘年会と新年会を兼ねた集まりがあり、完のほかに漫画家の加藤芳郎、料理記者の岸朝子が会の常連だった。

昭和 60 年には加藤芳郎の還暦を祝う会が行われ、完も出席している。

「「ふく田」という鮮魚の店は古くからの行きつけの店で、こういう土地にしては安くて上等の河豚を一年中食べさせてくれる」

(『東京人』 都市出版 1995 年 8 月号)



カルタゴ

中野駅南口にある地中海料理店。

「クスクスとかパエリアなど異国情緒でたべさせるから、友人を連れて行ったりすると珍しいので喜んでくれる。」

(『東京人』 都市出版 1995年8月号)



とんぺい

中野駅北口にあった居酒屋。昭和30～40年代に頻繁に通っていた。

この店の煮込みなどが好物だったという。名物、とんぺいカクテル、略して「とんカク」はエチルアルコールにジンジャーエールを入れ、レモンが添えられていた。

この「とんカク」について完は五木寛之に、「いいですよ、スカッとして。ぜひごちそうしてあげたいな」と冗談めかして語っている。

ヤエガキ酒蔵

中野駅南口にあった居酒屋。昭和30～40年代に頻繁に通っていた。

「外観も内容も平凡な大衆酒場だが、店員のしつけもよく、店全体の気っぷが気に入っている。かん酒、どびんむし、茶わん蒸し鮓(ひらめ)の唐揚げなど手品のように30秒以内で運んでくる。熱い肉豆腐が安くて旨い。本当に客の為を想って商売をしている点出色。」

(『旅』 新潮社 1968年1月号)

鮓磯

中野駅北口にある寿司店。

「僕がひいきにしている若い男に磯ずしの主人がいる。-略-この人は開店以来ずっと朝から晩まで小さいバイクに乗って出前の配達にかけずり廻っている。僕はこんなふうになんか泥んこになって働いている若い人をみるとすぐ好きになってしまうような単純なところがある。」

(『小説宝石』 光文社 1980年8月号)

中華五十番

中野駅北口にあった中華料理店。脱サラして店を構えた店主とはゴルフ仲間でもあった。

「自分の素質と体力を資本にして美味しいラーメンを庶民に提供し、裸一貫から自分の店を少しずつ立派に整えていったこの人の働きぶりを好ましいと思うのである」

(『小説宝石』 光文社 1980年8月号)

福建

中野駅北口にあった中華料理店。

「夫婦だけでやっている中華の店がいい味なのだが、休みが多いのが玉に疵」

(『東京人』 都市出版 1995年8月号)

上州屋

中野区野方駅南口にある和食料理店。

「いかなる小鉢一つ注文してもまことに神経の行き届いた細やかな味わいのある品物を客にだすのはただ感心するばかり」

(『小説宝石』 光文社 1982年1月号)



哲学堂公園



哲学堂公園の野球場で、よく友人たちと野球をしていた。

この他にも、中野駅北口にあった魚料理の「魚清」、健康的惣菜店「わしや」、五木寛之の著書『風に吹かれて』にも登場した「名曲喫茶クラシック」など、広く顔を出していたようだ。



「父の教え」 ～風間正氏インタビューより～

今回の展示に際し、画家としての規則正しい生活、行きつけのお店や好物、交流のあった人々など、様々なエピソードをご子息で映像作家の風間正氏にお聞きした。

正氏は「一生懸命やれ」と言われて育ったという。その言葉に込められた意味はどのようなものだったのだろうか。



父は2回兵隊に行っていますが、戦争の頃の話はしませんでした。ただ、戦中戦後の困難な時代を経験したことが影響しているのでしょうか、とても凝縮された時間を送った人生だった様な気がします。

遊ぶ時は一生懸命遊べ

食べる時は一生懸命食べろ

仕事する時は一生懸命仕事しろ

寝る時は一生懸命寝ろ

どんなことでもダラダラやっていると、良いものにはならないし、鈍感では心も豊かにならない、ということです。

見るもの感じるもの、すべてが絵に影響を与えます。父は日々の生活でも漫然と過ごすのではなく、どんな時も感覚のアンテナを張っていました。そういった父の画家としての在り方は、一流の仕事をする人が共通して持つ要素のような気がします。



▲風間完アトリエ

撮影：大津伴絵

だから、父の教えは「一生懸命やれ」。けれども、外から見て一生懸命やっているのがわかってはダメだ、とも言っていました。それは粹ではない、ということなのでしょう。

風間完の風貌

完の風貌について、弟である風間十郎は、「わが家系には珍しく白晳長身、若い頃からスマートな人」とその容姿を表現している。周囲の人の目には、完はどのように映っていたのだろうか。

「目の前にすらりと伸びてきたような爽やかさだ」

野見山暁治『とこしえのお嬢さん』「屋根裏のエトランゼ 風間完」より

「あの人は、（私はゴルフをしません）ゴルフもつよいし、
ゴルフ姿の似合うめずらしい日本人の一人です」

司馬遼太郎『もうひとつの風塵抄』より

「背の高い面長の美男子で、風采が洗練され颯爽としていた」

瀬戸内寂聴『奇縁まんだら』「風間完」より

「鋭い視線とは対照的な、人懐こい表情に接すると、摩訶
不思議な魅力に吸い込まれそうである」

六笠由香子『サンデー毎日』2003年2月16日号「人間列島」より

「ほとんど喜怒哀楽を顔にあらわさぬ風間氏の風貌は、それでいて
冷たいものではなく」

池波正太郎『食卓の情景』より

年表

年（西暦）	年齢	出来事
大正8（1919）年	0歳	東京の八丁堀に、10人兄弟の8番目として生まれる。家業は船の積荷の仲介。
大正12（1923）年	4歳	関東大震災で八丁堀の家が焼け、目蒲線洗足駅（現・目黒線洗足駅）付近に移り住む。
大正14（1925）年	小学生時代	現・品川区立第二延山小学校に通う。
昭和14（1939）年	20歳	東京高等工芸学校（現・千葉大学）卒業。 東北の小さな町で図画の教師となる。
昭和15（1940）年	21歳	2年間兵役で満州に出征。1年ほどで体を悪くし、陸軍病院で暮らす。その後帰国し、戦後まで学校教師や事務員などの仕事を転々とする。
昭和18（1943）年	24歳	新制作派展に出展を始める。
昭和19（1944）年	25歳	目黒から、下落合にある遠縁の風間道太郎宅へ引っ越す。
昭和20（1945）年	26歳	栃木県に疎開。現・宇都宮工業高等学校の教師となる。 宇都宮郊外の中島飛行機工場では終戦を迎える。
昭和21（1946）年	27歳	教師を辞め、栃木県から東京に戻る。出版社勤めの長兄宅に一時身を寄せ、ついで挿絵の仕事をするようになる。
昭和24（1949）年	30歳	兜屋画廊で個展を開く。 第13回新制作派展 新作家賞受賞。
昭和25～26（1950～51）年		この頃、中野区に住みはじめる。
昭和28（1953）年	34歳	永田力・高井寛二・齋藤三郎・油野誠一等と「エンピツの会」を結成する。
昭和29（1954）年	35歳	新制作協会会員となる。

年（西暦）	年齢	出来事
昭和32（1957）年	38歳	2年間、留学のためパリへ。グランド・ショーミエール研究所に学ぶ。
昭和35（1960）年	41歳	雑誌『風景』の表紙を創刊号から全号担当する。（昭和51年4月まで。全187号。）
昭和39（1964）年	45歳	講談社挿絵賞受賞。
昭和41（1966）年	47歳	画集『裏街の巴里』を東京書房より出版。
昭和42（1967）年	48歳	再度、1カ月半にわたり渡仏。フリードランデルの工房で銅版画を作成。
昭和44（1969）年	50歳	童話『おしゃもじ天狗』を童心社より出版。（文/堀尾青史）
昭和48（1973）年	54歳	画集『京まんだら』を東京文芸社より出版。
昭和49（1974）年	55歳	画集『女三十態』を芸友センターより出版。
昭和50（1975）年	56歳	画集『青春の門』を講談社より出版。
昭和51（1976）年	57歳	「銀座百点」の表紙画を担当する。（昭和54年まで）
昭和52（1977）年	58歳	初のエッセイ集『画家の引出し』を青娥書房より出版。出版祝いの会が中野の「第二カ酒蔵」で開かれる。 『現代の美人画4 風間完』を講談社より出版。
昭和53（1978）年	59歳	パリ留学時に作成した銅版画作品をまとめた『パリの時代』Ⅰ～Ⅲを現代版画センターより発行。それぞれ限定75部。
昭和54（1979）年	60歳	編集者数名と、還暦祝いを中野の「第二カ酒蔵」で行う。 『日曜画家の鉛筆画入門』を実業之日本社より出版。
昭和58（1983）年	64歳	『さし絵の余白に』を文化出版局より出版。 『エンピツ画のすすめ』を朝日新聞社より出版。

年（西暦）	年齢	出来事
昭和62（1987）年	68歳	絵本『白いねこと黒いねこのおはなし』をアーチスト出版より出版。
平成4（1992）年	73歳	『旅のスケッチ帖』を富士見書房より出版。
平成14（2002）年	83歳	第50回菊池寛賞受賞。
平成15（2003）年	84歳	『小説新潮』平成15年7月号フロントカットが絶筆となる。 がん性腹膜炎のため、逝去。

*主な情報源

『風間完 挿絵・原画展 松本清張と風間完』北九州市立松本清張記念館, 2001

『風間完の描く街展』上田市池波正太郎真田太平記念館, 2002

『作家の食と酒と』重金敦之/著, 左右社, 2010

『画家の引出し』風間完/著, 青娥書房, 1977

『さし絵の余白に』風間完/著, 文化出版局, 1983

『暗い夜の記念』風間道太郎/著, 未来社, 1981

『美術年鑑 昭和22-26年版』東京国立文化財研究所美術部/編, 東京国立文化財研究所, 1952

各新聞社 データベース

国立国会図書館 NDL-OPAC

雑誌・新聞連載作品 挿絵年表

年(西暦)	連載期間	作品名	作者	掲載紙(誌)	年齢
昭和28(1953)年	6月21日～12月8日	「恋あやめ」	邦枝完二	『朝日新聞』夕刊	34歳
昭和29(1954)年	8月～昭和30年4月	「真書太閤記」	坂口安吾	『知性』	35歳
	9月12日～昭和30年5月18日	「天下の糸平」	沙羅双樹	『京都新聞』	
昭和30(1955)年	6月～昭和31年4月	「真書太閤記」	檀一雄	『知性』	36歳
	6月21日～12月16日	「白扇」	邦枝完二	『朝日新聞』夕刊	
昭和31(1956)年	第1編：4月29日～昭和32年3月9日 第2編：昭和32年11月28日～昭和36年7月26日	「新・忠臣蔵」	舟橋聖一	『毎日新聞』夕刊	37歳
昭和33(1958)年	8月～昭和35年3月	「体当り女性論」	北原武夫	『週刊サンケイ』	39歳
	3月～9月	「ハナマ事件」	大佛次郎	『朝日ジャーナル』	
昭和34(1959)年	4月12日～12月27日	「すれすれ」	吉行淳之介	『週刊現代』	40歳
	5月～昭和35年4月	「針葉樹林」	瓜生卓造	『山と高原』	
	8月18日～昭和36年5月16日	「熊谷次郎」	富田常雄	『東京新聞』朝刊	
昭和35(1960)年	1月～7月	「ああ女難」	安岡章太郎	『週刊現代』	41歳
	2月～10月	「いざごさ手帳」	安岡章太郎	『週刊読売』	
	11月～昭和36年10月	「随筆 おんなの大学」	高橋義孝	『週刊サンケイ』	
昭和36(1961)年	5月～昭和37年8月	「江戸の顔役」	山手樹一郎	『別冊週刊サンケイ』	42歳
	4月～昭和39年12月	「天保図録」	松本清張	『週刊朝日』	
昭和37(1962)年	5月～昭和38年5月	「明治一代男」	柴田錬三郎	『文芸朝日』	43歳
	6月～昭和38年7月	「真田幸村」	海音寺潮五郎	『週刊読売』	
	7月21日～昭和38年7月18日	「この酒盃を」	円地文子	『産経新聞』	
	8月30日～昭和38年3月5日	「幸吉八方ころがし」	永井竜男	『読売新聞』朝刊	

年(西暦)	連載期間	作品名	作者	掲載紙(誌)	年齢
昭和38(1963)年	1月~7月	「ぎこつ式『人生ドック』」	高橋義孝	『週刊サンケイ』	44歳
	3月8日~9月28日	「大の虫小の虫」	永井竜男	『読売新聞』朝刊	
	8月11日~昭和41年6月12日	「国盗り物語」	司馬遼太郎	『サンデー毎日』	
	11月15日~昭和39年12月22日	「湖笛」	水上勉	『毎日新聞』夕刊	
昭和39(1964)年	1月~昭和40年1月	「柔」	富田常雄	『週刊読売』	45歳
	1月~9月	「技巧的生活」	吉行淳之介	『文藝』	
	3月~昭和41年5月	「おれは大物」	柴田錬三郎	『週刊明星』	
	4月23日~11月5日	「けむりよ煙」	永井竜男	『読売新聞』朝刊	
	7月~昭和46年4月	「昭和史発掘」	松本清張	『週刊文春』	
昭和40(1965)年	9月~昭和41年8月	「鬼の巻」	瀬戸内晴美	『文藝』	46歳
昭和41(1966)年	1月1日~12月28日	「西郷隆盛」	林房雄	『毎日新聞』夕刊	47歳
	1月~5月	「食へ物百年の歴史」	大原富枝	『栄養と料理』	
昭和42(1967)年	1月~12月	「紅刷り江戸噂」	松本清張	『小説現代』	48歳
昭和43(1968)年	1月~12月	「名作の中の食へ物」	菊村到	『栄養と料理』	49歳
	5月19日~昭和44年6月19日	「妻と女の間」	瀬戸内晴美	『毎日新聞』朝刊	
	12月9日~昭和44年11月17日	「北の海」	井上靖	『北海道新聞』朝刊・『東京新聞』 『中日新聞』・『西日本新聞』・『神戸新聞』	
昭和44(1969)年	3月~4月	「袈裟御前」	今東光	『週刊読売』	50歳
		「青春の門」	五木寛之	『週刊現代』	
	10月1日~昭和46年11月6日	「花神」	司馬遼太郎	『朝日新聞』夕刊	

年(西暦)	連載期間	作品名	作者	掲載紙(誌)	年齢
昭和45(1970)年	1月~12月	「食行事の歳時記」	柳原敬雄	『栄養と料理』	51歳
	5月7日~昭和47年4月14日	「玉椿物語」	水上勉	『信濃毎日新聞』・『京都新聞』・『南日本新聞』	
昭和46(1971)年	1月~12月	「そこが聞きたい味のコツ」	楠本憲吉	『栄養と料理』	52歳
	3月~11月	「桃介 脱サラリーマンの犬先輩」	小島直記	『新評』	
	4月~6月	「三つの心」	佐藤愛子	『婦人生活』	
	8月16日~昭和47年9月12日	「京まんだら」	瀬戸内晴美	『日本経済新聞』	
昭和47(1972)年	1月1日~昭和51年9月4日	「翔ぶか如く」	司馬遼太郎	『毎日新聞』朝刊	53歳
	1月7日~昭和48年5月4日	「食卓の情景」	池波正太郎	『週刊朝日』	
	2月~昭和49年2月	「失われた背景」	陳舜臣	『週刊サンケイ』	
	1月~12月	「ことばと食べ物」	伊吹一	『栄養と料理』	
昭和49(1974)年	9月17日~昭和50年7月26日	「凍河」	五木寛之	『朝日新聞』夕刊	55歳
	1月~昭和57年12月	「真田太平記」	池波正太郎	『週刊朝日』	
昭和50(1975)年	3月9日~昭和51年3月17日	「網」(「黒の線刻画」第一話)	松本清張	『日本経済新聞』	56歳
	7月1日~昭和51年9月1日	「準別王子の叛乱」	田辺聖子	『歴史と人物』	
昭和51(1976)年	10月12日~平成2年12月25日	「遠い崖」	萩原延寿	『朝日新聞』夕刊	57歳
昭和52(1977)年	1月~昭和54年5月	「漢の風楚の雨」	司馬遼太郎	『小説新潮』	58歳
	7月~昭和53年12月	「古都旅情」	瀬戸内寂聴	『太陽』	
昭和53(1978)年	10月16日~昭和54年10月17日	「ころも」	瀬戸内晴美	『読売新聞』朝刊	59歳
昭和54(1979)年	4月1日~昭和57年1月31日	「菜の花の沖」	司馬遼太郎	『産経新聞』朝刊	60歳
昭和55(1980)年	2月~昭和56年2月	「思い出トラップ」	向田邦子	『小説新潮』	61歳
昭和56(1981)年	4月~昭和57年2月	「寂聴巡礼」	瀬戸内寂聴	『太陽』	62歳
	7月~10月	「男と女ととき」	向田邦子	『小説新潮』	
昭和58(1983)年	10月14日~昭和59年7月20日	「食卓のつひやき」	池波正太郎	『週刊朝日』	64歳
	11月4日~昭和59年11月9日	「海軍こぼれ話」	阿川弘之	『週刊宝石』	
昭和59(1984)年	9月11日~昭和61年9月20日	「霧の会議」	松本清張	『読売新聞』朝刊	65歳

年(西暦)	連載期間	作品名	作者	掲載紙(誌)	年齢
昭和63(1988)年	1月26日～平成元年2月27日	「反逆」1部・2部	遠藤周作	『読売新聞』朝刊	69歳
平成元(1989)年	7月1日～平成2年7月31日	「さまよう霧の恋歌」	高橋治	『北海道新聞』朝刊・『東京新聞』朝刊 『中日新聞』朝刊・『西日本新聞』朝刊	70歳
平成2(1990)年	9月1日～平成3年9月13日	「男の一生」	遠藤周作	『日本経済新聞』朝刊	71歳
平成3(1991)年	1月13日～平成4年12月20日	「女ひと四季」	高橋治	『朝日新聞』日曜版	72歳
平成4(1992)年	1月2日～5月14日(未完)	「江戸繪師甲州靈獄党」	松本清張	『週刊新潮』	73歳
平成5(1993)年	10月1日～平成5年10月9日	「天狗争乱」	吉村昭	『朝日新聞』夕刊	74歳
	10月1日～平成5年10月9日 2月25日～8月26日	「蕪村春秋」 「不良ノート」	高橋治 百瀬博教	『朝日新聞』日曜版 『週刊文春』	
平成6(1994)年	1月1日～10月30日	「女」	遠藤周作	『朝日新聞』朝刊	75歳
平成7(1995)年	1月1日～3月25日	「黒い揚羽蝶」	遠藤周作	『北海道新聞』朝刊・『東京新聞』朝刊 『中日新聞』朝刊・『西日本新聞』朝刊	76歳
	3月28日～12月13日	「城盗り秀吉」	山田智彦	『読売新聞』夕刊	
平成9(1997)年	9月8日～平成8年7月14日	「百日紅の咲かない夏」	三浦哲郎	『北海道新聞』朝刊・『東京新聞』朝刊 『中日新聞』朝刊・『西日本新聞』朝刊	78歳
平成10(1998)年	9月22日～平成12年9月2日 2月～平成12年12月	「漁火」 「をんなな彩傑帖」	高橋治 高橋治	『朝日新聞』夕刊 『俳句』	79歳

採録対象

新聞・雑誌連載作品の挿絵。短編など、巻や号を跨がない作品の挿絵については採録を見送った。
※この表は、当館で調査し、判明した範囲内の情報で作成したものである。

主な情報源

- ・各作家の全集
- ・各新聞社 社史
- ・各新聞社 データベース
- ・『新聞連載小説総覧 平成期1989～2017』日外アソシエーツ, 2018
- ・『文藝年鑑』日本文藝家協会/編, 新潮社
- ・『新聞小説史年表』高木健夫/編, 国書刊行会, 1996
- ・『朝日新聞連載小説の120年』朝日新聞社, 2000
- ・栄養と料理 デジタルアーカイブス
- ・国立国会図書館 NDL-OPAC

展示風景



▲ 展示スペース



▲ ポスター



▲ 平置きガラスケース



正面入口ガラスケース ▶

展示物



◀ 『赤毛のアン』シリーズ全10巻
モンゴメリ/著，新潮社



『坂の上の雲』全8巻 ▶
司馬遼太郎/著，文藝春秋



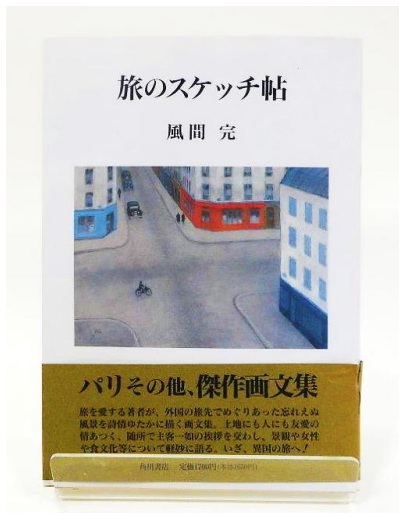
▲『北斗の人』 司馬遼太郎/著，角川書店



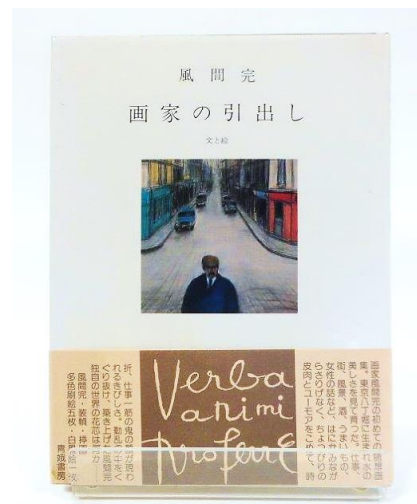
▲『故郷忘じがたく候』 司馬遼太郎/著，文藝春秋



▲『さし絵の余白に』 風間完/著，文化出版局



▲『旅のスケッチ帖』 風間完/著，角川書店



▲『画家の引出し』 風間完/著，青娥書房



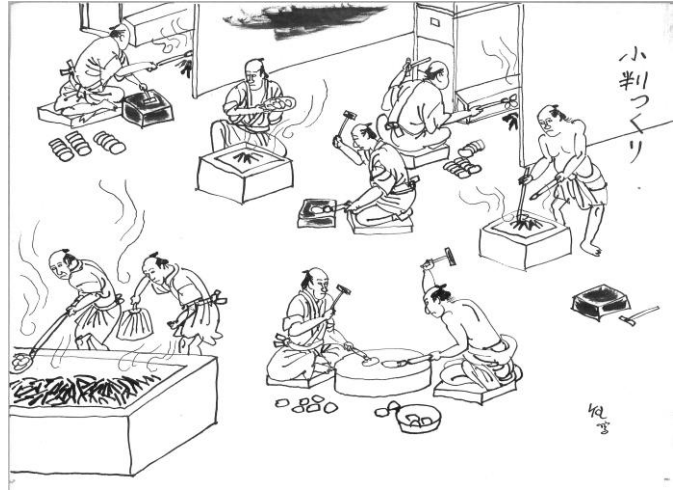
▲『風間完画集 京まんだら』 風間完/著，東京文芸社



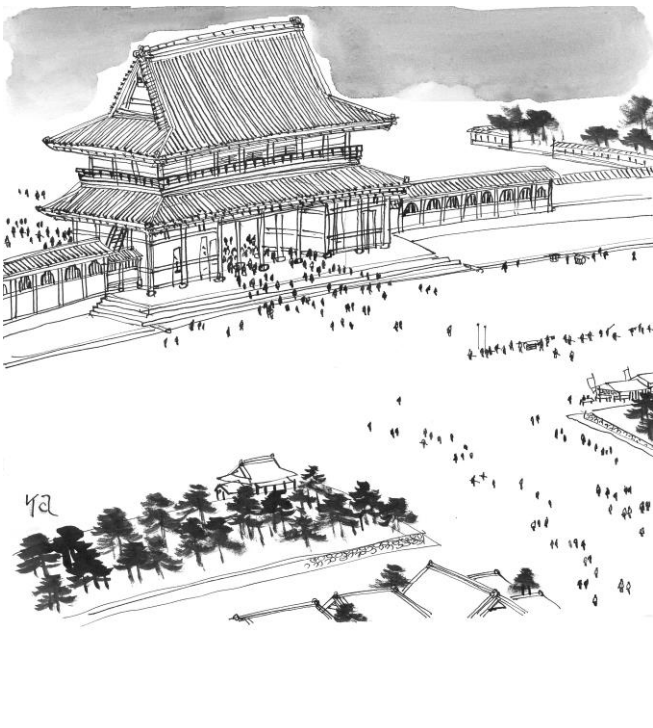
▲『風間完画集 青春の門』 風間完/著，講談社



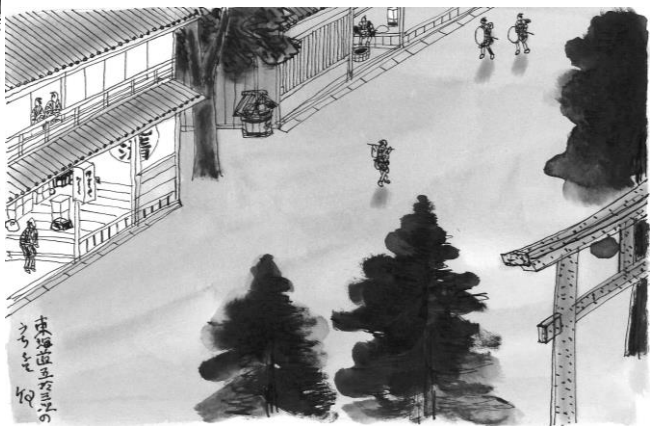
▲ 繰り糸 駕籠の絵 (『天保図録』松本清張/著より)



▲ 天保改革 金座に於ける小判品位の認定 (『天保図録』松本清張/著より)



◀ 江戸の人々 (『天保図録』松本清張/著より)

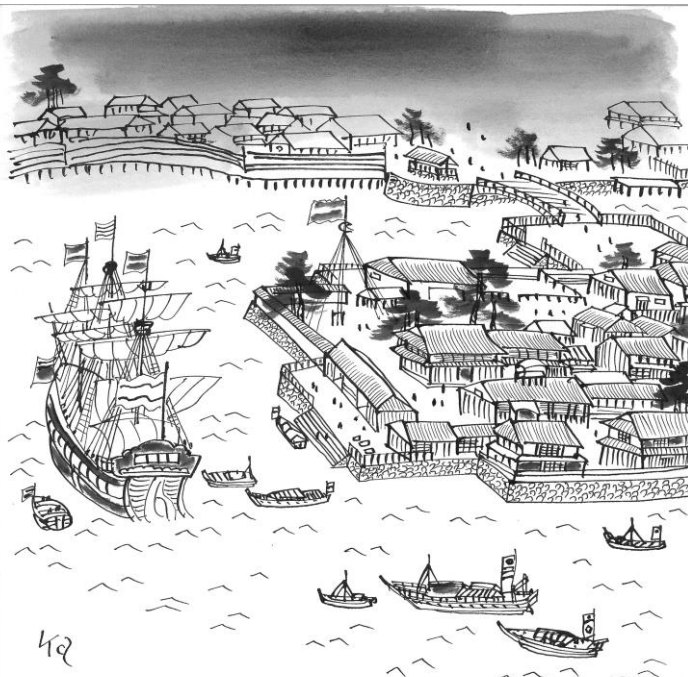


東海道五十三次のうち ▶
(『天保図録』松本清張/著より)

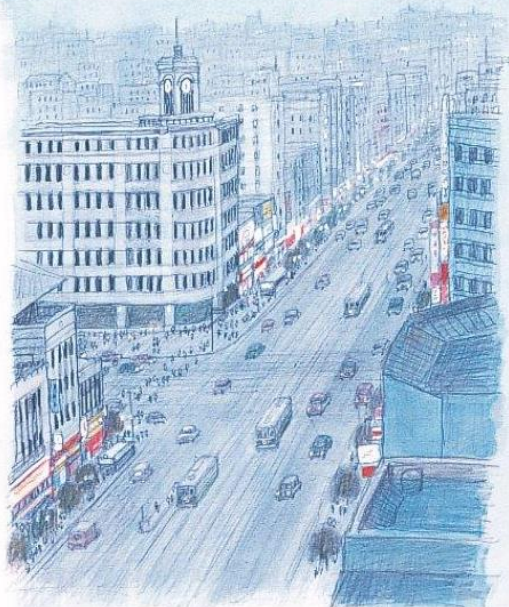
画像提供：北九州市立 松本清張記念館



▲ 檻の賢者 (『天保図録』松本清張/著より)



▲ 一網打尽 (『天保図録』松本清張/著より)



▲ 尾張町交差点
(記念館オリジナル映像「点と線」より)



▲ 二・二六事件
(『昭和史発掘』松本清張/著より)

画像提供：北九州市立 松本清張記念館



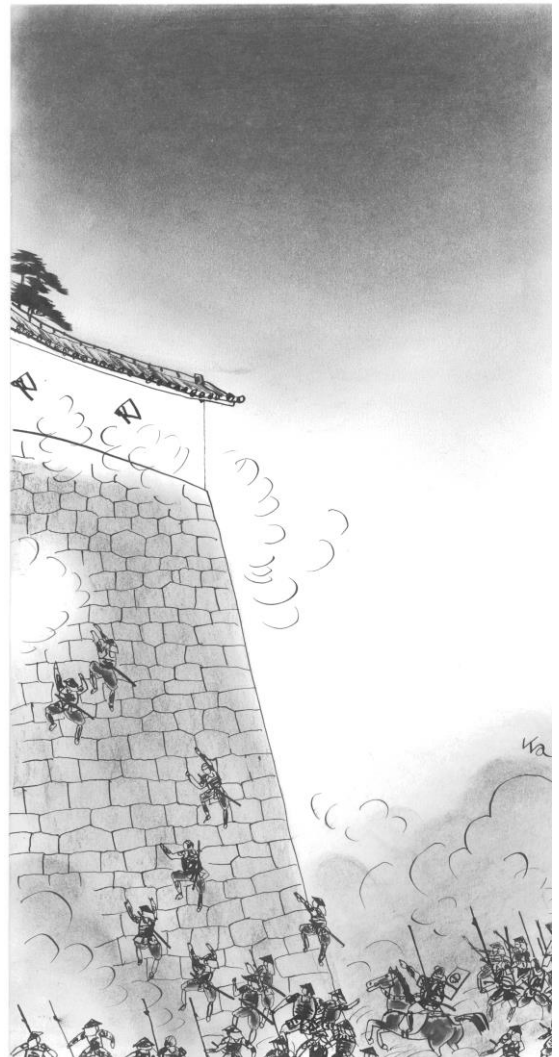
◀ 秘密

(『真田太平記』 池波正太郎/著より)



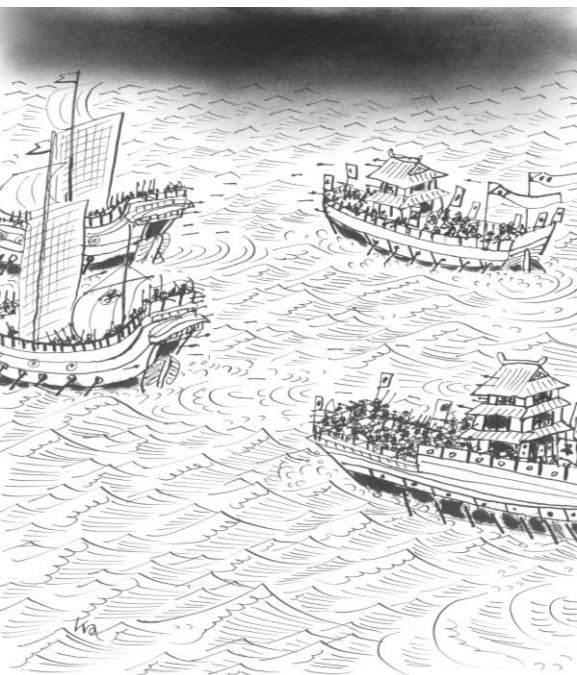
▲ 角兵衛を撃退する源二郎

(『真田太平記』 池波正太郎/著より)



▲ 上田城を攻める徳川軍

(『真田太平記』 池波正太郎/著より)



◀ 秀吉の朝鮮出兵

(『真田太平記』 池波正太郎/著より)

池波正太郎真田太平記館：蔵



▲幸村の見た夢（『真田太平記』池波正太郎/著より）



▲真田丸（『真田太平記』池波正太郎/著より）



▲関ヶ原（『真田太平記』池波正太郎/著より）

池波正太郎真田太平記館：蔵



◀桑名城の濠

(『食卓の情景』池波正太郎/著より)

池波正太郎真田太平記館：蔵

図書館の本と挿絵

中野区立図書館の現在のホームページで「風間完」と検索すると、検索結果は20件程度です。しかし、この後のブックリストが示すように、風間氏が関わった作品の蔵書は中央図書館だけでも100件を優に超えます。絵本などでない限り、図書館のデータには挿絵や装幀の項目がないので、検索しても拾われないのです。そのため、図書館ではなかなかその観点から本を探すことができません。今回の展示にあたっては、装幀に関する参考図書や、装幀をデータに採録する近代文学館や古書店の検索結果を元に、1冊見つけてはその著者の著書の所蔵分を総当たりする原始的な手法で、主に中央図書館の書庫を探索しました。昭和20年代、30年代の資料はほとんど当館の蔵書では確認できず、全貌には程遠い有様ですが、40年代以降の資料に関しては、それなりの数を発見できたのではないかと思います。

ロングセラーの表紙は、新版や新訳が出ると変更されることがあります。例えば風間氏が表紙を描いた旧版の新潮文庫「赤毛のアン」シリーズは、中野区立図書館にはそろっておらず、職員個人の蔵書を使用してガラスケースに展示しました。愛される作品は図書館でもたくさん読まれるので、提供できない状態になりやすく、新しく買い替えるときには、違う装幀のものになってしまうことがあるのです。

皆様も、ご自宅や実家にお手持ちの本を一度見返してみたいはいかがでしょうか。今ではもう見られない装幀の本が見つかるかもしれません。

第17回中野区ゆかりの著作者紹介展示 風間完ブックリスト

★展示した資料

請求記号のないものは未所蔵資料

風間 完の著作・著作が含まれる資料

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	旅のスケッチ	風間 完/著	富士見書房	1992	291/カ
★	37皿のオードブル	講談社/編	講談社	1985	596.0/サ
★	エンピツ画のすすめ	風間 完/著	朝日新聞社	1987	725.5/カ
★	日本の名随筆 別巻39		作品社	1994	914.68/ニ/B-39
★	値段の明治大正昭和風俗史 完結	週刊朝日/編	朝日新聞社	1984	337.8/ネ/4
★	「あまカラ」抄 3	高田 宏/編	富山房	1996	596.0/ア/3
★	木のこえ 花のうた	週刊朝日/編	朝日新聞社	1985	470.4/キ
★	現代漫画 7 小島功集(月報)	鶴見 俊輔/[ほか]編集	筑摩書房	1969	726.1/ゲ/7/
★	誕生日のアップルパイ		文芸春秋	1989	914.68/ベ/89
★	白いねこと黒いねこのおはなし	風間 完/作・絵	アーチスト出版	1986	E/カザ
★	粹	小学館/編集	資生堂	1987	702.1/イ
★	女優 (別冊太陽)		平凡社	1988	778.28/ジ/1
★	司馬遼太郎の聲音(中央公論9月号臨時増刊)		中央公論社	1996	910.268/シバ
★	女性美の描き方	風間 完/[ほか]著	アトリエ出版社	1983	724.5/ジ

風間完について

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	酒を愛する男の酒	矢口 純/著	新潮社	1981	914.6/ヤグ
★	山口瞳大全 第10巻	山口 瞳/著	新潮社	1993	918.68/ヤマ/10
★	コレクション滝口修造 1	滝口 修造/著	みすず書房	1991	708/タ/1
★	コレクション滝口修造 7	滝口 修造/著	みすず書房	1992	708/タ/7
★	暗い夜の記念	風間 道太郎/著	未来社	1981	916/カ
★	大恋愛	風間 研/著	講談社	1990	904/カ
★	うるわしき日々	小島 信夫/著	読売新聞社	1997	913.6/コジ
★	世界に誇れる日本の芸術家555	三上 豊/編	PHP研究所	2007	702.1/セ
★	大衆の心に生きた昭和の画家たち	中村 嘉人/著	PHP研究所	2007	726.5/ナ
★	書影の森	白田 捷治/編著	周防大島町(山口県):みずのわ出版	2015	022.5/ウ
★	司馬遼太郎対話選集 7 人間について	司馬 遼太郎/著者代表	文芸春秋	2006	914.6/シバ/7
★	風塵抄	司馬 遼太郎/著	中央公論社	1991	914.6/シバ
★	もうひとつの「風塵抄」	司馬 遼太郎/著	中央公論新社	2000	915.6/シバ
★	司馬遼太郎全集 23	司馬 遼太郎/著	文芸春秋	1977	918.68/シバ/23
★	司馬遼太郎全集 59	司馬 遼太郎/著	文芸春秋	1999	918.68/シバ/59
★	完本池波正太郎大成 別巻	池波 正太郎/著	講談社	2001	918.68/イケ/B
★	食卓の情景 下	池波 正太郎/著	埼玉福祉会	1999	596.2/イ/2
★	奇縁まんだら 終り	瀬戸内 寂聴/著	日本経済新聞出版社	2011	914.6/セト/3
★	安岡章太郎エッセイ全集 3	安岡 章太郎/著	読売新聞社	1976	914.6/ヤス/3
★	安岡章太郎の世界	かのう書房/編	かのう書房	1985	910.268/ヤス
★	中央線をゆく、大人の町歩き	鈴木 伸子/著	河出書房新社	2017	291.36/ス
★	名作挿絵全集 9		平凡社	1981	726.5/メ/9
★	名作挿絵全集 10		平凡社	1981	726.5/メ/10
★	祇園、うっとこの話	吉村 薫/述	平凡社	2018	289.1/ヨ

司馬遼太郎

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	新選組血風録	司馬 遼太郎/著	中央公論社	1996	913.6/シバ
★	言い触らし団右衛門	司馬 遼太郎/著	中央公論社	1978	913.6/シバ
★	慶応長崎事件	司馬 遼太郎/著	講談社	1973	913.6/シバ
★	妖怪	司馬 遼太郎/著	講談社	1978	913.6/シバ
★	故郷忘じがたく候	司馬 遼太郎/著	文芸春秋	1974	913.6/シバ
★	豊臣家の人々	司馬 遼太郎/著	中央公論社	1977	913.6/シバ
★	花咲ける上方武士道	司馬 遼太郎/著	中央公論社	1996	913.6/シバ

第17回中野区ゆかりの著作者紹介展示 風間完ブックリスト

★展示した資料

請求記号のないものは未所蔵資料

池波正太郎

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	日本剣客伝 上巻	南条 範夫/[ほか]著	朝日新聞社	1980	913.68/ニ/1
★	真田太平記読本	池波 正太郎/[ほか]著	新潮社	2016	913.6/イケ
★	真田太平記 1	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1974	913.6/イケ/1
★	真田太平記 2	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1975	913.6/イケ/2
★	真田太平記 3	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/3
★	真田太平記 4	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/4
★	真田太平記 5	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/5
★	真田太平記 6	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/6
★	真田太平記 7	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/7
★	真田太平記 8	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/8
★	真田太平記 9	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/9
★	真田太平記 10	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/10
★	真田太平記 11	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1980	913.6/イケ/11
★	真田太平記 12	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1981	913.6/イケ/12
★	真田太平記 13	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1981	913.6/イケ/13
★	真田太平記 14	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1982	913.6/イケ/14
★	真田太平記 15	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1982	913.6/イケ/15
★	真田太平記 16	池波 正太郎/著	朝日新聞社	1983	913.6/イケ/16

瀬戸内寂聴

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	寂聴巡礼	瀬戸内 寂聴/著	平凡社	1982	914.6/セト
★	寂聴巡礼(装画本)	瀬戸内 寂聴/著	平凡社	1982	186.9/セ
★	古都旅情	瀬戸内 晴美/著	新潮社	1984	915.6/セト
★	京まんだら 上	瀬戸内 晴美/著	講談社	1979	913.6/セト/1
★	京まんだら 下	瀬戸内 晴美/著	講談社	1976	913.6/セト/2
★	瀬戸内晴美長編選集 第2巻(月報)	瀬戸内 晴美/著	講談社	1980	918.68/セト/2
★	色徳 上巻	瀬戸内 晴美/著	新潮社	1980	913.6/セト/1
★	色徳 下巻	瀬戸内 晴美/著	新潮社	1980	913.6/セト/2

向田邦子

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	向田邦子ふたたび		文芸春秋	1983	910.268/ムコ
★	向田邦子全対談	向田 邦子/著	文芸春秋	1985	914.6/ムコ
★	隣りの女	向田 邦子/著	文芸春秋	1984	913.6/ムコ
★	女の人差し指	向田 邦子/著	文芸春秋	1985	914.6/ムコ
★	思い出トランプ	向田 邦子/著	新潮社	1981	913.6/ムコ
★	男どき女どき	向田 邦子/著	新潮社	1982	913.6/ムコ
★	男どき女どき(文庫)	向田 邦子/著	新潮社	2011	913.6/ムコ

吉行淳之介

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	おしゃべり・えっせい 1	円地 文子/[ほか]編	朝日新聞社	1984	914.6/エン/1
★	おしゃべり・えっせい 2	円地 文子/[ほか]編	朝日新聞社	1984	914.6/エン/2
★	平和の中の主戦場	島尾 敏雄/著	冬樹社	1990	914.6/シマ
★	作家の自伝 39 吉行淳之介	佐伯 彰一/監修	日本図書センター	1995	910.268/ヨシ
★	新潮日本文学 53		新潮社	1979	918.6/シ/53
★	個人全集月報集	講談社文芸文庫/編	講談社	2012	910.26/コ
★	吉行淳之介全集 第8巻	吉行 淳之介/著	新潮社	1998	918.68/ヨシ/8
★	吉行淳之介全集 第13巻	吉行 淳之介/著	新潮社	1998	918.68/ヨシ/13
★	木馬と遊園地	吉行 淳之介/著	潮出版社	1983	914.6/ヨシ
★	日日すれすれ	吉行 淳之介/著	読売新聞社	1987	914.6/ヨシ
★	面白半分対談	吉行 淳之介/著	講談社	1978	914.6/ヨシ
★	昭和文学よもやま話	十返 肇/著	潮出版社	1980	910.26/ト

第17回中野区ゆかりの著作者紹介展示 風間完ブックリスト

★展示した資料

請求記号のないものは未所蔵資料

松本清張

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	点と線	松本 清張／著	文藝春秋	2009	913.6/マツ
★	松本清張の残像	藤井 康栄／著	文芸春秋	2002	910.268/マツ
★	松本清張全集 32	松本 清張／著	文藝春秋	1973	913.6/マツ/32

山本周五郎

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	生きている山本周五郎	土岐 雄三／著	未来社	1986	910.268/ヤマ
★	わが山本周五郎	土岐 雄三／著	文芸春秋	1970	910.268/ヤマ
★	研究・山本周五郎	木村 久邇典／編	学芸書林	1973	910.268/ヤマ
★	山本周五郎	木村 久邇典／著	福武書店	1985	910.268/ヤマ/3
★	夫 山本周五郎	清水 きん／著	文化出版局	1980	910.268/ヤマ

五木寛之

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	凍河 上	五木 寛之／著	文芸春秋	1978	913.6/イツ/1
★	凍河 下	五木 寛之／著	文芸春秋	1978	913.6/イツ/2
★	さしえの50年	尾崎 秀樹／著	平凡社	1987	726.5/オ
★	真夜中対談	五木 寛之／著	文芸春秋	1971	914.6/イツ

遠藤周作

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	遠藤周作文学全集 15	遠藤 周作／著	新潮社	2000	918.68/エン/15
★	最後の花時計	遠藤 周作／著	文芸春秋	1997	914.6/エン

野見山暁治

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	とこしえのお嬢さん	野見山 暁治／著	平凡社	2014	914.6/ノミ

風間完の挿絵画・装丁

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	春砂	赤木 駿介／著	友人社	1990	913.6/アカ
★	流域紀行	朝日新聞社／編	朝日新聞社	1976	915.68/リ
★	夫帰り来よ	石田 あき子／著	講談社	1970	911.36/イ
★	白磁盒子	井筒 豊子／著	中央公論社	1993	913.6/イズ
★	運河	井上 靖／著	筑摩書房	1967	911.56/イ
★	北の海	井上 靖／著	中央公論社	1976	913.6/イノ
★	廓の女	井上 雪／著	朝日新聞社	1981	913.6/イノ
★	おしゃもじ天狗	井原 西鶴／原作	童心社	1975	913/ホ
★	街の匂い	内海 隆一郎／著	講談社	1994	914.6/ウツ
★	水の砦	大久保 智弘／著	講談社	1995	913.6/オオ
★	ハンガリア舞曲をもう一度	大野 芳／著	講談社	1989	913.6/オオ
★	国民の文学 14 (姿三四郎/富田 常雄)	大佛 次郎/[ほか]監修	河出書房	1968	913.68/コ/14
★	国民の文学 25 (湖笛・城/水上 勉)	大佛 次郎/[ほか]監修	河出書房新社	1969	913.68/コ/25
★	日本女性史 全7巻	笠原 一男／編	評論社	1975	367.2/カ/1-7
★	舞台の上の社会	風間 研／著	みずす書房	2000	772.3/カ
★	幕末の日本	金子 治司／著	早川書房	1992	210.5/カ
★	遺された妻	上坂 冬子／著	中央公論社	1983	329.6/カ
★	伊作とその娘たち	上坂 冬子／著	鎌倉書房	1980	281.0/カ
★	幽霊になった男	源氏 鶏太／著	講談社	1978	913.6/ゲン
★	十四人の信長	講談社／編	講談社	1991	913.68/ジ
★	女王卑弥呼と倭の五王	小林 幹男／著	評論社	1976	210.3/コ
★	娘の結婚	近藤 啓太郎／著	講談社	1984	913.6/コン

第17回中野区ゆかりの著作者紹介展示 風間完ブックリスト

★展示した資料

請求記号のないものは未所蔵資料

★	田端文士村	近藤 富枝／著	中央公論社	1983	910.26/コ
★	鹿鳴館貞婦人考	近藤 富枝／著	講談社	1980	210.6/コ
★	本郷菊富士ホテル	近藤 富枝／著	中央公論社	2012	910.26/コ
★	真書太閤記	坂口 安吾／著	六興出版	1982	913.6/サカ
★	ソクラテスの妻	佐藤 愛子／著	中央公論社	1979	913.6/サト
★	父母の教え給いし歌	佐藤 愛子／著	集英社	1981	913.6/サト
★	ああ戦いの最中に	佐藤 愛子／著	講談社	1974	913.6/サト
★	殺された道案内	佐藤 雅美／著	文芸春秋	2001	913.6/サト
★	恵比寿屋喜兵衛手控え	佐藤 雅美／著	講談社	1993	913.6/サト
★	半次捕物控 影帳	佐藤 雅美／著	講談社	1992	913.6/サト
★	メニューの余白	重金 敦之／著	講談社	1993	596.0/シ
★	舌の向くまま	重金 敦之／著	講談社	2000	596.0/シ
★	ノンちゃんの冒険	柴田 翔／著	筑摩書房	1977	913.6/シバ
★	21世紀版少年少女古典文学館 25 おくの細道	司馬 遼太郎／[ほか]監修	講談社	2010	918/ニ/25
★	美しく老いたし	島崎 政子／著	講談社	1995	914.6/シマ
★	養蜂記	杉浦 明平／著	中央公論社	1995	914.6/スギ
★	地下鉄で「昭和」の街をゆく大人の東京散歩	鈴木 伸子／著	河出書房新社	2015	291.36/ス
★	芸づくし忠臣蔵	関 容子／著	文芸春秋	2002	774.0/セ
★	歌右衛門合せ鏡	関 容子／著	文芸春秋	2002	774.2/ナ
★	小説野中兼山 上巻	田岡 典夫／著	平凡社	1978	913.6/タオ/1
★	小説野中兼山 中巻	田岡 典夫／著	平凡社	1978	913.6/タオ/2
★	小説野中兼山 下巻	田岡 典夫／著	平凡社	1979	913.6/タオ/3
★	隼別王子の叛乱	田辺 聖子／著	中央公論社	1994	913.6/タナ
★	私本・インツップ物語	田辺 聖子／著	講談社	1988	913.7/タ
★	ささやき歳時記	高橋 治／著	角川書店	1992	911.30/タ
★	つぶやき歳時記	高橋 治／著	角川書店	1990	911.30/タ
★	流域	高橋 治／著	講談社	1989	913.6/タカ
★	女ひと四季	高橋 治／著	朝日新聞社	1999	911.30/タ
★	星の衣	高橋 治／著	講談社	1995	913.6/タカ
★	さまよう霧の恋歌 上	高橋 治／著	新潮社	1991	913.6/タカ/1
★	さまよう霧の恋歌 下	高橋 治／著	新潮社	1991	913.6/タカ/2
★	花と心に囲まれて	高橋 治／著	講談社	1992	914.6/タカ
★	東京故事物語	高橋 義孝／編	河出書房新社	1974	382.1/ト
★	港みなど	田中 小実昌／著	潮出版社	1982	913.6/タナ
★	ふらふら記	田中 小実昌／著	潮出版社	1979	915.6/タナ
★	日本の文学 74 (細雪/谷崎 潤一郎)	谷崎 潤一郎／[ほか]編	中央公論社	1979	918.6/ニ/74
★	神戸ものがたり	陳 舜臣／著	平凡社	1998	914.6/チン
★	味に想う	角田 房子／著	中央公論社	1993	914.6/ツノ
★	薩南示現流	津本 陽／著	文芸春秋	1983	913.6/ツモ
★	明治撃剣会	津本 陽／著	文芸春秋	1982	913.6/ツモ
★	恋貧乏	常盤 新平／著	東京書籍	1991	913.6/トキ
★	旅する気分	常盤 新平／著	東京書籍	2017	915.6/トキ
★	おけら	永倉 万治／著	文芸春秋	1996	913.6/ナガ
★	移動遊園地	永倉 万治／著	中央公論社	1993	913.6/ナガ
★	ふるさとの菓子	中村 汀女／著	アドスリー	2006	596.6/ナ
★	おしん 1	橋田 寿賀子	日本放送出版協会	1983	912.7/ハシ/1
★	おしん 2	橋田 寿賀子	日本放送出版協会	1983	912.7/ハシ/2
★	おしん 3	橋田 寿賀子	日本放送出版協会	1983	912.7/ハシ/3
★	おしん 4	橋田 寿賀子	日本放送出版協会	1984	912.7/ハシ/4
★	少年時代 1	マルセル・パニョル／著	評論社	1974	953/パニ/1
★	少年時代 2	マルセル・パニョル／著	評論社	1975	953/パニ/2
★	少年時代 3	マルセル・パニョル／著	評論社	1975	953/パニ/3
★	はやぶさ新八御用帳 9 王子稲荷の女	平岩 弓枝／著	講談社	1998	913.6/ヒラ/9
★	はやぶさ新八御用帳 10 幽霊屋敷の女	平岩 弓枝／著	講談社	1999	913.6/ヒラ/10
★	驟(ハン)り雨	藤沢 周平／著	新潮社	1985	913.6/フジ
★	半ちく半助捕物ばなし	古山 高麗雄／著	新潮社	1977	913.6/フル
★	身世打鈴	古山 高麗雄／著	中央公論社	1980	913.6/フル

第17回中野区ゆかりの著作者紹介展示 風間完ブックリスト

★展示した資料

請求記号のないものは未所蔵資料

★	百日紅の咲かない夏	三浦 哲郎/著	新潮社	1996	913.6/ミウ
★	浅草橋場・すみだ川	水野 明善/著	新日本出版社	1986	910.26/ミ
★	彗星物語 上	宮本 輝/著	角川書店	1992	913.6/ミヤ/1
★	彗星物語 下	宮本 輝/著	角川書店	1992	913.6/ミヤ/2
★	道頓堀川	宮本 輝/著	筑摩書房	1981	913.6/ミヤ
★	螢川	宮本 輝/著	筑摩書房	1978	913.6/ミヤ
★	パリ環状通り	パトリック・モディアノ/著	講談社	1975	953/モデ
★	不良ノート 下	百瀬 博教/著	文芸春秋	2002	914.6/モモ/2
★	銃殺	もりた なるお/著	講談社	1990	913.6/モリ
★	喫茶店の片隅で	諸井 薫/著	毎日新聞社	1992	914.6/モロ
★	未知子	諸井 薫/著	新潮社	1988	913.6/モロ
★	東京の雑木林	矢口 純/著	福武書店	1991	914.6/ヤグ
★	カツドウヤ水路	山本 嘉次郎/著	筑摩書房	1965	778.2/ヤ
★	心に太陽を持って	山本 有三/編著	新潮社	1979	914.6/ヤマ
★	吉川英治全集 5 江戸三国志	吉川 英治/著	講談社	1983	918.68/ヨシ/5
★	吉川英治全集 7 牢獄の花嫁	吉川 英治/著	講談社	1983	918.68/ヨシ/7
★	水よりも濃く	吉川 英明/著	講談社	1992	913.6/ヨシ
★	天狗争乱	吉村 昭/著	朝日新聞社	1994	913.6/ヨシ
★	落日の宴	吉村 昭/著	講談社	1996	913.6/ヨシ
★	私の映画遺言	淀川 長治/著	中央公論社	1993	289.1/ヨ
★	少年少女日本文学館 11 伊豆の踊子・泣虫小僧		講談社	1986	918/シ/11
★	世界少年少女文学全集 29		創元社	1955	908/セ/29

ガラスケース展示資料

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	風間完画集 青春の門	風間 完/著	講談社	1975年	726.5/カ
★	風間完画集 京まんだら	風間 完/著	東京文芸社	1979年	726.5/カ
★	ぎんざ1982		日本リクルートセンター	1982年	M26/B02
★	画家の引出し	風間 完/文・絵	青娥書房	1977年	726.5/カ
★	さし絵の余白に	風間 完/著	文化出版局	1983年	720.4/カ
★	坂の上の雲 全8巻	司馬 遼太郎/著	文藝春秋	1999年	913.6/シバ/1-8
★	赤毛のアン 1-10	モンゴメリ/著	新潮社	1987-89年	
★	故郷忘じがたく候	司馬 遼太郎/著	文藝春秋	1974年	913.6/シバ
★	北斗の人	司馬 遼太郎/著	角川書店	1970年	
★	ぼくたちの失敗 (CD)	森田 童子/演奏	ワーナーミュージック	1993年	P07

雑誌・新聞掲載記事

	題名	著者名	出典	出版者名	請求記号
★	中野半径五キロ圏内。	風間 完/著	東京人 1995年8月号	都市出版	ZG4/D/95
★	風間完の挿絵で見る江戸・東京風景	藤井 康栄/著	東京人 2006年5月号	都市出版	ZG4/D/227
★	文士行きつけの「うまい店」。	重金 敦之/著	東京人 2010年2月号	都市出版	ZG4/D/277
	飲み食いするとき	風間 完/著	小説宝石 1980年8月号	光文社	
	わたし好みの味と店	風間 完/著	小説宝石 1981年9月号	光文社	
	味覚風物詩 河豚屋	風間 完/著	小説宝石 1982年1月号	光文社	
	私の行きつけの味の店	風間 完/著	旅 1968年1月号	新潮社	
★	小さな大物 187		文藝春秋 2003年1月号	文藝春秋社	雑誌
	母の像 霧のような想い	風間 完/著	子どものしあわせ 1977年3月号	福音館書店	
	妹夫婦と弟	風間 完/著	中央公論 1961年6月号	中央公論新社	
	「昭和史発掘」の思い出	風間 完/著	オール読物 1992年9月号	文藝春秋	
	松本清張さんの思い出	風間 完/著	小説宝石 1992年9月号	光文社	
	画家・松本清張	風間 完/著	文芸春秋 1973年11月号	文芸春秋	
	司馬さんと見た桜島	風間 完/著	本の窓 1986年10月号	小学館	
	別れがたい可愛い女たち	風間 完/著	文芸春秋 1983年8月号	文芸春秋	
	風間完訪問記 心おきなく版と向かいあう	岡田 隆彦/著	版画芸術 1983年7月号	阿部出版	

原画を収蔵している資料館

池波正太郎真田太平記館 ★

〒386-0012

長野県上田市中央3丁目7番3号

TEL : 0268-28-7100 FAX : 0268-28-7101

URL: <https://www.city.ueda.nagano.jp/site/ikenami/>



北九州市立 松本清張記念館

〒803-0813

福岡県北九州市小倉北区域内2番3号

TEL : 093-582-2761 FAX : 093-562-2303

URL: <https://www.seicho-mm.jp/>

司馬遼太郎記念館

〒577-0803

大阪府東大阪市下小阪3丁目11番18号

TEL : 06-6726-3860 FAX : 06-6726-3856

URL: <https://www.shibazaidan.or.jp/>



★…常設展示あり

※常設されていない館の収蔵品については、企画展開催時のみ公開しています。企画展などの情報は、各資料館のホームページにてご確認ください。

協力者・協力機関一覧 (五十音順・敬称略)

風間正

池波正太郎真田太平記館
北九州市立 松本清張記念館

第 17 回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

風間 完

～名作を彩る叙情画家～

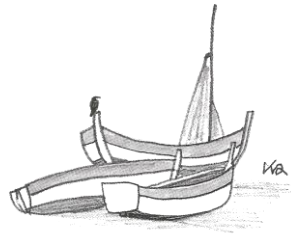
発行年月日 2021 年 3 月 31 日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷番号 2 指中教図中第 259 号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野 2 丁目 9 番 7 号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090



中野区立図書館

<https://library.city.tokyo-nakano.lg.jp/>